

厚生労働科学研究の成果

厚生労働科学研究の成功例と十分な成果に至らなかった例

抽出範囲

過去3年(平成19~21年度)の間に終了した研究課題

<成功例>

各研究事業ごとに、事後評価の高かった研究課題

<十分な成果に至らなかった例>

各研究事業ごとに、事後評価の低かった研究課題(※)

などの中から、それぞれ10例を選択した。

※なお、当初の研究目標等からみて十分な成果に至らなかったと評価されたものでも、その研究の過程で得られた知見や経過などに一定の意義が認められる場合もあることに留意を要する。

事後評価の主な評価事項

1. 専門的・学術的観点からの評価
 - ・ 研究目的の達成度
 - ・ 学術的・国際的・社会的意義
 - ・ 研究成果の発展性
 - ・ 研究内容の効率性
2. 行政的観点からの評価
 - ・ 厚生労働行政への貢献度

厚生労働科学研究における主な成果の内容

1.治療、検査、ワクチン等の開発

- **自己細胞による角膜再生法の開発**
→自分の細胞を用いて角膜を再生させる基盤的な技術を開発。今後の臨床応用が期待される。
- **超低出生体重児への脳室内出血予防法の開発**
→超低出生体重児(400g以上600g未満)にインドメタシン(※)を投与することで、低出生体重児に見られる脳室内出血を予防できることを示した。
今後の臨床応用が期待される。 ※炎症をおさえる薬。
- **子宮頸がん原因ウイルスに対する予防ワクチンの開発**
→子宮頸がん原因ウイルスのうち、特にがんを発症させるリスクの高い15種類のウイルスすべてに効果のあるワクチンを開発。
現在世界20カ国で特許を申請中。
- **成人T細胞性白血病(※1)に対して有効な治療法を開発**
→難治性の成人T細胞性白血病に対して、血縁者の末梢血幹細胞(※2)の移植が有効であることを確認。今後の臨床応用が期待される。
※1 ウイルス感染が原因で起こる白血病。西南日本に多い。予後不良で平均生存期間は約1年。
※2 血液を構成する細胞(赤血球、白血球など)に分化する能力を持った細胞。
- **肝炎治療の効果を予測する遺伝子の発見**
→肝炎患者の血液検査により、治療効果を予測することのできる遺伝子を発見。今後の臨床応用が期待される。
- **心筋梗塞治療等に用いられるステント(※)の開発**
→既存の製品が有する重大な副作用等の問題を解決し、体に吸収されるステント(※)を開発。特許取得済み。今後の製品化が期待される。
※心筋梗塞等で詰まった血管を広げるために用いられる医療機器。

2.ガイドライン、指針、通知等の作成に貢献(医療機関等で活用)

- **「食物アレルギーの診療の手引き」の作成**
→食物アレルギーについて症例等を分析し、診断・治療方法等について体系的に整理。
- **「インフルエンザ脳症(※)ガイドライン」の作成**
→インフルエンザ脳症について症例等を分析し、診断・治療方法等について体系的に整理。
※インフルエンザウイルス感染により引き起こされる意識障害やけいれんなどの合併症。無治療では致死率約30%の予後不良の疾患。
- **潰瘍性大腸炎(※)およびクローン病(※)の診療ガイドラインの作成**
→治療の標準化を図るため、潰瘍性大腸炎およびクローン病の診断・治療方法等について体系的に整理。
※原因不明の難治性の炎症性腸疾患。若年者に多く下痢・腹痛などの症状をもたらす。患者数は約12万人。
- **遺伝子組換え食品の検知法の開発**
→安全性未審査である特定の遺伝子組換え食品(例:中国産のコメの遺伝子組換え食品など)の検知法を新たに開発し、その手法を実用化した。
検疫所に導入済み。

厚生労働科学研究における十分な成果に至らなかった事例

- 大腸がん術後化学療法の有効性等を確認する研究において、十分な症例が集まらなかったため、期待された成果をあげることができなかった。
- 甲状腺がんに対する内視鏡(※)手術が従来の手術方法に優越するかどうかを検証する研究において、十分な症例が集まらなかったため、期待された成果をあげることができなかった。
 - ※ 先端にレンズのついた管を体の中に入れて観察し、処置・治療をする医療機器。
- 国内では確認されていない寄生虫への、在留外国人の感染状況の把握等の研究において、十分な症例が集まらなかったため、期待された成果をあげることができなかった。
- 関節リウマチ(※)の早期診断に役立つ指標を開発する研究を試みたが、研究期間内に見つけることができなかった。
 - ※ 関節に炎症(関節炎)がおこり、腫れや痛み、変形を引き起こす病気。
- 化学物質の有害性を評価する手法を確立する研究を試みたが、研究期間内に確立には至らなかった。
- 研究試料の収集に関して、倫理委員会の審査に時間を要したため、研究期間内に収集体制の整備には至らなかった。
- 脳梗塞患者に対して自分の細胞を用いて治療する臨床研究を計画したが、細胞を処理する施設が災害により使用不能となり、施設の変更などに時間を要し、期待された成果をあげることができなかった。
- 使用した物質の安定性が不十分であることが判明し、研究成果の精度が十分でなかった。
- 障害を受けた神経を再生させる治療法の開発を試みたが、本研究により行われた各基礎研究の結果をさらに統合させる観点からの研究が十分行われず、研究期間内に開発まで至らなかった。
- エイズワクチンに必要な有効性を評価する手法を開発する研究を試みたが、ヒトに適応できるかどうか、明確に示されなかった。